

石川迪夫著「考証 福島原子力事故」(炉心溶融・水素爆発はどう起こったか)の読後の感想文(「ありがとうございました」の言葉とともに)

2014. 5. 宅間正夫

本書は、一言で言って、国際的に見ても福島原子力事故の本質に迫る大作・名著である、と確信している。私は、原子力の安全に関して我が国のみならず世界的にも著名な著者が渾身の力を込めて原子力関係者に伝えたい気持ちを書に表したものと受け止めており、理論・解析と現場・実験の双方に精通された著者でなければ到底無しえない偉業である、と感じている。しかも学術論文に匹敵すべき内容にもかかわらず、原子力関係者に限らず原子力に関心のある一般の方々にも伝えたいということから、できるだけ理解しやすいようにと、話の展開の工夫に加えて、読者に語り掛けるトーンで書かれていることに、著者の強い思いを感じた。

福島事故に関する公表されている事実とデータを基に、さらに、TMI 前後など今まで行われてきた安全研究の成果を参照しつつ、ゆるぎない論理によって考証を進めるストーリー展開は圧巻である。それは、難解とされる原子力の科学・技術にもかかわらず、あたかもシャーロック・ホームズや刑事コロンボ、あるいはクロフツの倒叙推理小説を紐解くがごとく、期待と楽しみに駆られて次々とページを繰ってしまふのに例えられよう。

また、自ら原子力発電に関わりつつも恥ずかしながら「そうだったのか」と啓発されるような新たな知識や見方がふんだんに盛り込まれている。たとえば、「チャイナシンドローム」で刷り込まれた「炉心溶融＝メルトダウン」の概念が間違っていることを、TMI 事故の後処理から得られた研究成果を引きながら説明されていること、福島事故では未だ実見できない炉心溶融のデブリの形状が具体感をもってイメージできること、などなど。同一の起因で事故に至ったにもかかわらず3基に原子炉が漏洩水素に対して様相も爆発【1・3号】時刻も違ったのはなぜか、証拠を示しつつ綿密な論理展開でわかりやすく説明されている。

第1部「炉心溶融・水素爆発はどう起こったか」に続く第2部「原子力安全向上と福島復興の論点」では、専門家による事故の進展予測もなく、かつ住民への理由説明もなく行われた住民避難の強行に対して、著者の厳しい見解が率直に記されている。この事故で実際に明らかになった、水をくぐらせたSCベント

の放射能低減の極めて大きな有効性ととともに、そのベントが不適切に遅らされたことへの憤りがほとばしる。また、安全思想の問題に触れて、原子力開発当初の「安全設計＝原子力安全」から、今回の事故を教訓に、原子力発電を取り巻く周辺環境(設備・設計はもちろん、人と組織、統治能力、意志と意識など、

原子力運営のためのインフラを指すものと理解)を改めることにより「原子力発電の安全」へと脱皮すべきこと、さらに自然災害やテロを視野に入れて、災害の緩和低減をめざす「防災安全」へと進化させるべき、と著者は指し示す。「福島事故が我々に教示したことは、“自然災害は安全設計のインプット(前提条件)ではなく、過酷事故をひき起こす脅威となりうる、という具体的教訓」、という著者の言葉は重い。

この書にはまた、著者の JPDR 廃止措置・解体の教訓に基づく、これから 30～40 年続くといわれる複数事故炉の廃止措置へのアドバイスなど、原子力関係者や一般の方々に何としてでも伝えておきたい著者の切々たる思いが随所にぎっしりと詰まっている。

私は、著者がこの書で言外に込めた、実際に原子力発電を扱う原子力産業界の関係者に対して「姿勢を正せ」というメッセージを、自省の念を込めて深刻に受け止める。その意味からも、この書は原子力産業界の関係者に是非とも一読していただきたいと願っている。

余人を以ってかえがたい著者の計り知れない力量と情熱に圧倒される思いで、よくぞこの書を世に表してくださった、と心から感謝したい。